英米文化学会第 43 回大会

2025 年 9 月 6 日（土）

シンポジウム

近世英国におけるアイデンティティの探求

proceedings

高野　美千代

佐藤　正幸

Angus Vine

佐藤　幸治

菅野　智城

曽村　充利

シンポジウム　近世英国におけるアイデンティティの探求
序にかえて

高野 美千代

はじめに

> … if there are such men to be found, who would be strangers to Learning and their own Country, and Foreigners in their own Cities, let them please themselves
>
> "Mr. Camden's Preface" to *Britannia* (1695)

本シンポジウムでは、2024 年度より活動を開始した分科会のこれまでの研究成果の発表・報告を兼ね、16 世紀から 17 世紀のイギリスにおいて、国と国内各地域のアイデンティティの探究が、アンティクエリー、歴史家、科学者そして詩人たちの手によっていかに行われたのかを考察する。具体的には、ウィリアム・カムデン（William Camden, 1551-1623）がヨーロッパ諸国に対して英国のナショナル・アイデンティティをアピールした大作 *Britannia*『ブリタニア』（初版 1586 年）をはじめ、カムデンの流れを汲む、あるいは同種の思潮に沿った作品群を扱い、その中に描かれた英国の宗教的アイデンティティ、民族的アイデンティティ、国と国内各地域アイデンティティ等を考察する。シンポジウムでは、17 世紀英国のアンティクエリーによるアイデンティティ探求を主に扱う 4 名（佐藤正幸、佐藤幸治、Angus Vine、高野美千代）と、それ以外の同時代著者によるアイデンティティ探求を扱う 3 名（曽村充利、菅野智城、石川英司）が、それぞれの研究対象すなわち具体的にはカムデンをはじめ、マイケル・ドレイトン（Michael Drayton, 1563-1631）、ウィリアム・ダグデール（William Dugdale, 1605-86）、ロバート・プロット（Robert Plot, 1640-96）、ベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572-1637）、ウィリアム・ペティ（William Petty, 1623-87）、アイザック・ウォルトン（Izaak Walton, 1593-1683）に関して論じる。

テーマ背景

本分科会で扱う課題は、近世英国のアンティクエリーによるアイデンティティ探求の研究に端を発している。アンティクエリーは、急速に変化する近世英国の社会の中で、自らのアイデンティティを積極的に形成し、表現しようとした。カムデンは、遠い過去を現在に復元すること（"restore antiquity to Britain, and Britain to its antiquity"）を意図しており、アンティクエリーが古代の遺物、文書、風習などを研究することは、長い歴史の中における自分自身を理解し、かつ世界における、あるいは他者との関係の中で自らの位置を定義する手段であった。これは、過去への関心だけでなく、彼らと同時代の社会的・知的背景と複雑に絡み合っていた。分科会ではまずアンティクエリーの作品群に注目し、そのうえでアンティクエリー以外の手による著作を考察の対象に含めて研究テーマの検討を進めてきた。

さて、日本語で「好古学者」「古物研究家」などと訳されるこの アンティクエリー（"antiquary"） であるが、一体どのような人々だったのだろうか。アンティクエリーは、おもに史料・文献によって過去の研究をした。たとえば、ギリシャ・ローマの文献や、当時の英国に残る古文書や古銭などから、より古い時代の自国の社会制度、文化風習、宗教などを探るなどしていた。すなわち、古文書や考古学的遺物が、歴史研究において最も信頼できる証拠であると考えていた。歴史がナラティブであるのに対し、好古学は個々のアイテムの考察である。20 世紀イタリアの歴史家アルナルド・モミリアーノによれば、アンティクエリーは「歴史」ではなく「歴史的事実」に興味を持っている人間なのである。[1]「考古学」では、発掘作業を行い、そこで得たアイテムから過去の生活や文化を探るのだが、好古学研究においてフィールドワークを伴う調査や同時代史の執筆も行われたので、ひとりのアンティクエリーが考古学者でもあるというケースはもちろんある。アンティクエリーはエリザベス I 世朝の 16 世紀終わりから協会を構成しての活動が始まり、いったん活動が休止することもあったが、21 世紀の現在でもイギリスには複数のソサエティが存在する。

カムデンをはじめとするアンティクエリーは、古代の遺跡や歴史的文献史料の研究を通じて、母国の長い歴史を理解しようと努めた。カムデンの研究手法は、旅行で集めた資料分析、古文書の精読によるもので、アントウェルペンの地理学者で地図作成者のオルテリウス（Abraham Ortelius, 1527-98）に触発されたものであった。オルテリウスは 1570 年に世界初の近代地図と言われる『世界の舞台』*Theatrus Orbis Terrarum* を出版しており、1571 年には英国を訪れて調査を行っていた。彼はローマ帝国の地図の制作・出版に関わっていたことでよく知られる。このオルテリウスから奨励され、カムデンは母国の地理的歴史的詳細をまとめた *Britannia* をラテン語で執筆し、ヨーロッパ各国の学者を主な読者層に想定して出版した。16 世紀から 17 世紀の宗教的・政治的混乱の時代に、この研究はナショナリズムすなわち国民的誇りと団結の意識を育む役割を果たし、17 世紀に入って英語版が出版されると英国内の読者層がさらに広がった。母国の過去の慣習や系譜をさかのぼることで、英国国民としての帰属意識を生み出し、母国の地理や歴史の理解を共有することで、

国民的アイデンティティの構築につなげることに結びついた。アンティクエリーの研究の範囲は、具体的に例を挙げれば遺跡・遺構、建築物、モニュメントといった歴史的遺物、古文書等の記録資料、過去の社会慣習、言語、法律などである。その他、トポグラフィーあるいはコログラフィーといった、場所や地域に関する記述であるとか、国の発展に関する歴史記述、さらには地図など、研究の成果は多様な形をとって発表されていった。彼らの研究方法と発見は、のちに歴史学や考古学などの学問分野の進展にも貢献し、知的アイデンティティの形成に結びついていく。

アンティクエリーは、彼らの時代の複雑さに向き合いながら、遠い過去の研究を通じて国家、社会、知的アイデンティティを形成していったと言える。16 世紀の英国は宗教改革の時代であり、ヘンリーVIII 世による修道院の解散（Dissolution）の影響として、教会建築物だけでなく、そこに収蔵されていた書物や史料等の貴重な知的遺産が失われるという危機に瀕していた。カトリック的要素を排除しようとするピューリタンの活動は、英国国教会への攻撃にも及んだ。17 世紀の革命期にはさらにそれが激化し、アンティクエリーにとってはとくに耐え難い状況を目の当たりにすることになった。残されるべきものを喪失から守るために記録するのはアンティクエリーの使命であった。

アイデンティティ探求

膨大な資料を一つの出版物として上梓したカムデンの功績は大きく、それを起点として英国アンティクエリーの研究は発展を遂げていった。カムデンは、中世からの伝説に基づいた歴史から脱却し、実際に古文書や遺跡を調査して過去を復元しようと試みた。その影響下にある好古学者たちは、カムデンが採った研究方法を引き継ぐようにしてアイデンティティを探求し、確立しようとした。アンティクエリーの著作は、純文学ではない散文作品である。しかし、例外的に好古学的要素を持つ詩が存在する。それはドレイトンによる『ポリ・オルビオン』（*Poly Olbion*）という、ブリテン島の地理・地形と歴史を称える長編叙事詩である。タイトルはギリシャ語に由来するもので、「ブリテンの多様性」といった意味である。豊かな自然にあふれたブリテン島の風景を、地域ごとに分けてうたう内容で、コログラフィーの代表作品と言える。長さは 15,000 行に及ぶ。ドレイトン自身はソネット詩人や戯曲作家としても知られているが、本課題においてはアンティクエリーかつ歴史的詩人という一面に注目している。

カムデンと同じく紋章官を務めたダグデールは 17 世紀英国を代表するアンティクエリーであった。カムデンの研究方法に倣い、フィールドワークと精緻な文献資料の分析解読作業を基にした著作執筆を行った。研究の対象は修道会を含む英国のキリスト教会の歴史と信徒の関わり、故郷ウォリックシャの歴史的故事、英国の法の歴史等多岐にわたる。紋章官のダグデールが典型的なアンティクエリーとすると、ロバート・プロットはその特徴が大いに異なる。たとえば、プロットが意図したのは、地域の名門一族の歴史をたどるような過去の人間の営みを中心とする地誌ではなく、むしろ研究対象の中心を科学に置き、自然史を中心とする博物誌である。プロットが執筆したオックスフォードシャとスタフォードシャについての地域博物誌は、従来の好古学における故事古物研究に加えて科学的な要素を大いに含むもので、非常に画期的な研究となり、大変好評を博した。英国の好古学研究は、ジョン・レイランド（John Leland, 1503-52）が国内を旅して収集した資料という土台があり、その後カムデンらが偉業を成し遂げていった。プロット自身は先人に敬意を払いつつ、レイランドやカムデンと同じようにフィールドワークを徹底的に行い、実証的なアプローチで新たな成果を築き上げた。プロットの作品については日本国内ではほぼ未踏の研究領域であるので、テクストの詳細な分析と検討を行った結果を提示していくものとする。

たとえばエリザベス朝アンティクエリー協会のメンバーがヘラルドと呼ばれる紋章官や貴族あるいは政治家を中心としていたように、17 世紀のアンティクエリーの多くが王党派で国教会高教会派、保守派のナショナリストであった。しかし本分科会では、アンティクエリー以外による作品の中に読み取ることができる同時代のアイデンティティ探求についても検討しているため、著作のジャンルや著者の宗教的あるいは政治的スタンスが異なる出版物も考察の対象に取り入れている。アイザック・ウォルトンはアンティクエリーではないものの、保守派で、同時代伝記作家としてよく知られる。遠い過去の時代に生きた人間のバイオグラフィーも歴史補助学の一部であり、アンティクエリーの研究手法のひとつであった。ウォルトンは、イギリス人的な考え方や振る舞いの模範を作品に記し、著書の『釣魚大全』（*The Compleat Angler*, 1654-76）と『伝記集』（*Lives*, 1640-78）において、保守的人間、アングリカン的人間のアイデンティティを描き出している。一方、ウィリアム・ペティは政治的宗教的立場を他の作家と異にする。彼の教育パンフレットに注目して、内乱期の教育改革とアイデンティティの関係を教育パンフレットに見られる合理主義と関連付けて考察する。

---

[1] Arnaldo Momigliano, *The Classical Foundations of Modern Historiography* (U of California Press, 1990), p. 54.

ランケ史学の受容基盤としてのウイリアム・カムデン史料論
――英国・日本・中国の近世歴史学を比較する――

佐藤正幸（山梨大学）

問題設定

21 世紀の歴史理論は、19 世紀ドイツ実証主義史学（別名ランケ史学）をもって嚆矢とする。その歴史理論の根幹であるモットー「事実をあったがままに “wie es eigentlich gewesen” 記述する」は、世界各国によって、それぞれ自国の伝統的歴史研究を受容基盤として受け入れられてきた。

今回の発表では、英国におけるランケ史学受容プロセスの特徴をカムデンの史料論・史料分類論に焦点を当てて検討し、近世の日本・中国と比較することでその特質を解明したい。

ドイツ実証主義史学の理論と方法論は別名ランケ史学とは呼ばれるが、実はランケの著書を通してではなく、エルンスト・ベルンハイムの『歴史学入門』によるところが大であった。この歴史理論は、19 世紀後半、アカデミーから大学に学術研究の中心が移る機会を捉えて、世界中に広まった。

最初にランケ史学の理論的整理を行ったベルンハイムの歴史理論、中でもその根幹を占める史料論の紹介から始めたい。

ベルンハイムの史料論

Ernst Bernheim (1850 – 1942)は *Lehrbuch der historischen Methode* (1889)とその簡約版である *Einleitung in die Geschichtswissenschaft* (1905)を出版しているが、広く読まれたのは簡約版の方であった。日本では、ベルンハイム（著）坂口昂（訳）『歴史とは何ぞや』（岩波書店、1922）として翻訳出版され、現在でも刊行され続けている。

この歴史理論の内容は、翻訳書の出版以前に、坪井九馬三『史学考究法』(1903)や田中萃一郎「史学研究法講義ノート」（1912）によって大学の講義として紹介されてきた。

ベルンハイムの歴史理論の根幹は、古代ギリシャローマの伝統的道徳史観をリフレインするのではなく、一次史料をもって研究の出発点とするという、当時としては画期的方法であった。その史料論の全体像は、以下に提示する目次によってその概要が把握できるであろう。

> 目次 /[第一節 史學の他の科學に對する關係]：言語學・文字學・古公文書學・印璽學・古錢學・系譜學及び人名案內・紋章學・紀時法・地理學。[第二節 史料學]：直接の觀察及び思出・報告(傳承)・口碑(歌謠及び物語、傳說、宗教傳說、逸話、流行語、俚諺)・文字による傳承(歷史的金石文、系譜的記錄及び官吏表、年代記及び時代記、傳記、言行錄、散らし文及び新聞)・繪畫による傳承・ 遺物(殘留物、言語、狀態、風俗、制度、諸產物、事務上書類、統計記錄) (記念物及び金石文、古文書並に公式文書)・史料案內及び史料纂集(書物の知識、重要なる史料出版物特に『ドイツ史料集成』の內容、圖書館、記錄文庫、博物館の知識)。[第三節史料批判]。

ウイリアム・カムデン史料論

ウイリアム・カムデン(William Camden1551-1623)は、英国の史学史上、一大金字塔を打ち立てた歴史家である。代表的著作としては、連合王国を一つの国家として歴史的に叙述した『ブリタニア *Britannia*』(1586)と、エリザベス一世の伝記である『年代記 *Annales*』(1625)がある。加えて、彼の名を今日に伝えるのは、オックスフォード大学のカムデン教授職(Camden Professorship of Ancient History)だ。

以下で研究対象とするのは、彼のもう一つの著作『英国史料集成 *Remaines Concerning Britain*(1605)』である。この著作で彼が採用した史料分類法が、19 世紀英国におけるランケ史学導入の受容基盤を形成してきたからだ。

> Contents(目次); The Inhabitants of Britain 英国の居住民たち / Languages 諸言語 / The Excellency of" the Englifh Tongue / 英語の優越性 / Chriftian Names 洗礼名 / Ufual Chriftian Names of Men 男性洗礼名一覧 / Chriftian Names of Women 女性洗礼名 / Surnames 名字 / Allufions 引喩 / Rebus, or Name-devifes 判じ物 / Anagramms アナグラム / Money 貨幣 / Apparel 衣服 / Artillery 大砲 / Armouries 紋章 / Wife Speeches 名演説集 / Proverbs 格言一覧 / Poems 詩歌集成 / Epigramms エピグラム（寸鉄詩） / Rythmes リズム / ImprefTes 銘・紋章 / Epitaphs 墓銘碑 / ImpofTibilities 不可知事象 / Annagrams アナグラム

カムデンの史料論の根幹は、古代ギリシャローマの伝統的道徳史観の再解釈ではなく、英国に残存している一次史料を収集し、それに基づいて過去を再構成するという発想である。彼の史料蒐集範囲は過去と現在の英国に限られているため地誌編纂色が強いが、これまで著述されてきた歴史叙述をなぞるのではなく、直接一次史料にあたり、それを研究するという学問的姿勢が見てとれる。

この歴史研究方法はまだ当時の主流ではない。そのためカムデンは、Antiquarian と評されたが、この Antiquarianism のその後の蓄積が、19 世紀英国におけるランケ史学の受容基盤となり、現代英国史学の繁栄の礎を築いてきた。

ランケ史学の英国における導入は、ケンブリッジ大学を嚆矢とする。これはアクトン卿（Lord Acton, 1834-1902）が 1895 年にケンブリッジ大学近代史欽定教授に就任するとともに開始された。彼の歴史理論を端的に示すのは、『ケンブリッジ近代史』執筆者に向けたアクトン卿の言葉(1902) である。

> Our Waterloo must be one that satisfies French and English, German and Dutch alike" and that readers should be unable to tell where one contributor laid down his pen and another took it up. [Peter Burke(ed.), *New Perspectives on Historical Writing*, (Cambridge, 1991) pp.5-6.]
> 我らの叙述するワーテルロー（の戦い）は、フランス人にもイギリス人にも、ドイツ人にもオランダ人にも等しく受け入れられるものでなければならない。そして読者には、誰が筆を置き、誰がその筆を継いだのか、その境目が分からぬほどに、連続した叙述でなければならない。

カムデンの『英国史料集成』に見られる一次史料から歴史を叙述するという発想は、彼の死から 250 年後に、「確実な史料に基づいて事実をあったがままに記述する歴史叙述」というアカデミズムにおける歴史研究の基本理念となって、今日まで続くことになる。

日本・中国との比較

カムデン史料論の特質を明確にするために、日本と中国におけるランケ史学受容の様子と比較してみるのがよい。

日本におけるランケ史学受容の基盤は、塙保己一『群書類従』(1793-現在)である。寛政 5 年（1793 年）に木版で刊行が開始されたもので、その当時まで存在してきた重要な一次史料を版木に彫って印刷刊行した。正編は 1273 種 530 巻 666 冊、続編は 2103 種、1000 巻、1185 冊で現在も続編が刊行中である。カムデンの『英国史料集成』の１００倍以上の分量であり、ドイツの『ドイツ史料集成(*Monumenta Germaniae Historica*)』とか、イタリアの『イタリア史料集成(*Rerum Italicarum scriptores*)』をも凌駕するスケールである。その史料分類法を紹介したい。

> 目次：神祇部 /帝王部 /補任部 /系譜部 /伝部 /官職部 /律令部 /公事部 /装束部 /文筆部 /消息部 /和歌部 /連歌部 /物語部 /日記部 /紀行部 /管弦部 蹴鞠部 /鷹部 /遊戯部 /飲食部 /合戦部 /武家部 /釈字部 /雑部。

考えてみれば、歴史研究は史料が存在する古い伝統文化を持った国でしか行いえない学問であることが再認識させられる。

一方中国では、梁啓超『中国歴史研究法』（1922）がランケ史学導入の嚆矢である。この本は現在でも刊行されているベストセラーだ。しかし内容はベルンハイムの『歴史とは何ぞや』の翻訳で、歴史的事例を中国史の出来事に置き換えたものにすぎない。当時最新の歴史理論・方法論としては、むしろ顧頡剛『古史辨自序』(1926) の方が傑出している。伝統的中国においては、歴史の分野は次のように史料分類されてきた。

> 史部：正史・編年・紀事本末・別史・雑史・詔令奏議・伝記（聖賢・名人・総録・雑録・別録）・史鈔・載記・時令・地理（総志・都会郡県・河渠・辺防・山川・古蹟・雑記・外紀）・職官（官制・官箴）・政書（通制・典礼・邦計・軍政・法令・考工）・目録（経籍・金石）・史評。

中国では歴史上、残存する一次史料が極めて少なく、唐代以降の歴史資料はそのほとんどが印刷物である。そして上記の史部分類の上に現在中国の歴史研究は続けられている。つまり、伝統的規範史学と西洋伝来の認識的史学とが両立してきているといえる。

結論

英国は 19 世紀後半にドイツ実証主義史学を受容し、大学という新しい学術組織に、この実証主義による歴史研究を組み入れることで、それぞれが旧来の道徳史観から脱却し、「事実をあったがままに記述する」という現在に続く歴史研究スタイルを確立してきた。

日本においては地方公共団体がスポンサーとなって道府県・市町村を単位とした伝統的歴史編纂が継続中である。ところが執筆者は例外なしに、大学のドイツ実証主義史学で訓練された日本人歴史家である。この歴史叙述的融合現象が日本史学の特徴と言える。

文化を比較するという作業は、それぞれの特質を明確にしてくれる点で、有効である。日本人研究家が英米文化の研究をするときは、日本文化という我々の持って生まれたメリットを有効に使うことで、英米文化研究に独自の貢献を行うことが出来るのではないだろうか。（終）

Michael Drayton (1563–1631): 'Poet Historicall' and Antiquary

Angus Vine

A 'poet historical'

Michael Drayton (1561–1631) has never been the most fashionable of English poets. Modern literary accounts, if they discuss him at all, tend to represent him as a 'belated' writer: as a poet with an essentially Elizabethan worldview, who had the misfortune to live out more than half his adult life after Queen Elizabeth I had died in 1603, and as a writer whose work was defined by a powerful nostalgia for that earlier era. The American scholar Richard Hardin, for example, characterized him as a writer who was 'as conservative in poetry as he was in politics', and who 'continued writing the kinds of verse that had already been out of date in his youth'.[1]

However, whilst Drayton was undoubtedly both a conservative and a nostalgic writer, such views seriously underestimate his significance as a 'poet historical' (a term invented by his contemporary Edmund Spenser [1552?–1599]), and his lifetime of experimenting with different forms and genres of history. Drayton, as the critic Bart Van Es has recently observed, sought to enact 'a newly explicit interaction between literary and historical texts'.[2] He was also one of the most thoughtful contributors to the classic literary critical debate about the relationship between poetry and history: a debate whose roots lay in Aristotle's *Poetics*, the foundational work for European aesthetics.

For Aristotle and his Renaissance imitators such as Sir Philip Sidney (1554–86), the essential difference between poetry and history was that whereas poetry 'ever setteth virtue so out in her best colours', history 'being captived to the truth of a foolish world, is many times a terror from well-doing and an encouragement to unbridled wickedness'.[3] Drayton, however, took a different view: for him, the two disciplines were not so clearly distinguished, and were in fact at their most effective as teachers of virtue when they were mixed. As a result, he undertook a lifelong project to bring the two disciplines into productive dialogue.

Drayton's earliest attempts here were fairly conventional historical works in the genre known as 'complaint poetry': *Peirs Gaveston, Earle of Cornwall. His Life, Death, and Fortune* (1593), *Matilda. The Faire and Chaste Daughter of the Lord Robert Fitzwater* (1594), and *The Tragicall Legend of Robert, Duke of Normandy, Surnamed Short-Thigh, Eldest Sonne to William Conqueror* (1596). Subsequent (and more successful) attempts included *Mortimeriados* (1596), a narrative poem focusing on the turbulent reign of Edward II, *The Barons Warres* (1603), an historical epic on the same subject, and *Englands Heroicall Epistles* (1597), a collection of fictional love letters in verse by figures from medieval and Tudor history, written in imitation of Ovid's *Heroides*.

These works were all, however, preliminary to Drayton's most significant experiment with historical genre and form: *Poly-Olbion* (1612 and 1622). Issued in two parts ten years apart, *Poly-Olbion* mixes learned antiquarian research into Britain's past with detailed topographical descriptions of the country's landscapes and literary conventions from classical epic. The work's scholarly credentials were burnished by the fact that it was also a collaboration with one of the leading antiquaries of the day: the lawyer, legal historian, and Hebraist John Selden (1584–1654). Selden provided an immensely learned prose commentary to the first part of *Poly-Olbion*, which was intended to explain historical uncertainties and illuminate obscure or otherwise difficult matters.

Chorography, antiquarianism, and epic

In the programmatic opening lines of *Poly-Olbion*, Drayton signalled not only the scope of his poem, but also its distinct mixture of genres, influences, disciplines, and traditions:

> OF ALBIONS glorious Ile the Wonders whilst I write,
> The sundry varying soyles, the pleasures infinite
> (Where heate kills not the cold, nor cold expells the heat,
> The calmes too mildly small, nor winds too roughly great,
> Nor night doth hinder day, nor day the night doth wrong,
> The summer not too short, the Winter not too long)
> What helpe shall I invoke to ayde my Muse the while?[4]

As an invocation to the Muse, these lines, first of all, align *Poly-Olbion* with classical epic. They also, though, map out Drayton's own distinctive territory in the poem and his particular mixture of interests. They underscore the fact that this will be a poem about the history, geography, and ecology of Britain (or 'Albion', as he dubs it here).

What then follows in the rest of *Poly-Olbion* is a richly imagined, self-consciously literary survey of Britain's history and topography. As Drayton's narrator travels on his imaginary journeys up and down Britain, he encounters anthropomorphized rivers, forests, and mountains. These features of the landscape, depicted by Drayton as nymphs and spirits, sing to his narrator, and when they sing, they narrate Britain's history, map its geography, and describe its ecology—the 'Wonders' of 'ALBIONS glorious Ile', as the opening line puts it.

This combination of interests (history, geography, topography, ecology) was also the defining characteristic of the genre that was the single most important influence on *Poly-Olbion*: 'chorography'. The ancient Greek mathematician and geographer Claudius Ptolemy defined 'chorography' as that discipline which 'sets down the individual localities, each one independently and by itself, registering practically everything down to the least thing therein (for example, harbours, towns, districts, branches of principal rivers, and so on)'.[5] The same understanding of the word applied in Drayton's day. The mathematician Arthur Hopton (*c*. 1580–1614), for example, called chorography 'the Arte, whereby wee be taught to describe any particular place […] delivering all things of note contained therein, as ports, villages, rivers, not omitting the smallest'.[6]

This kind of comprehensive topographical description is exactly what Drayton set out to do in the poem. The work's thirty Songs are characterized by lengthy catalogues, from genealogies of kings and queens to lists of rivers and forests. In applying this approach to both geographical *and* historical subject matter, Drayton was following in the footsteps of a number of recently published antiquarian surveys. Works such as William Lambarde's *A Perambulation of Kent* (1576), William Harrison's *The Description of England* (1577, 1587), and William Camden's *Britannia* (first published in 1586) had pioneered this mixed historical and geographical approach.

Drayton signalled his own debt to the chorographic tradition most obviously through his work's two title-pages. Both the letterpress title and the magnificent, engraved frontispiece present *Poly-Olbion* as an intervention in this genre. The former (the printed title-page) explicitly identifies *Poly-Olbion* as a work of chorography: 'POLY-OLBION. | or | *A Chorographicall* Description of *Tracts, Rivers,* | *Mountaines, Forests*, and other Parts of this renowned *Isle* | of *Great Britaine*, | With intermixture of the most Remarquable *Stories*, *Antiquities*, *Wonders*, | *Rarityes, Pleasures*, and *Commodities* of | the same: | *Digested in a Poem*'. The latter, which was the work of the prolific engraver William Hole (*d*. 1624), suggested the same thing through its complex iconography and its series of figures and images.

Hole's frontispiece similarly mixes geography and history. As such, it offers a visualization of Drayton's chorographic poetics. The frontispiece is dominated by the large female figure, Albion, who sits underneath the grand arch at its centre. This figure is a representation of Britain itself. The shape of her dress is designed to resemble a map of the British Isles, whilst around her neck she wears a necklace of three strings of pearls as an allusion to the three kingdoms of England, Scotland, and Wales, and she is surrounded by the sea. In her right hand, she holds a sceptre, one of the symbols of monarchy. In her left hand, she carries a cornucopia, or horn of plenty: an emblematic representation of the copiousness of Drayton's project. Surrounding her, and standing on the capitals and plinth, are four foundational figures from British history and myth (the Trojan Brutus, the Roman Julius Caesar, the Saxon Hengist, and the Norman William the Conqueror). These four figures represent four different genealogies (Trojan, Roman, Saxon, and Norman), four different national origins for Britain and the Britons, and four different traditions that histories of Britain from Drayton's period commonly recounted. The frontispiece signals that *Poly-Olbion*, in keeping with its copious poetics, will do the same.

A commercial flop

Drayton's literary ambitions for *Poly-Olbion* were, in the end, not matched by commercial success. For all his bold experimentation with history and geography, copies of the poem did not sell in anything like the numbers that either he or his publishers had hoped. Readers, it seems, were not quite ready for this 'Topo-chrono-graphicall POEME' (as the poet George Wither [1588–1667] called it in a commendatory poem that he wrote for the second part). Critics over the years have proposed all sorts of reasons for *Poly-Olbion*'s commercial failure, from its forbidding length (at over 15,000 lines long) to its often obscure antiquarian subject matter. However, its mixed nature may also have been a significant factor here. That is to say, the thing which made *Poly-Olbion* so innovative and significant a work—its mixtures of history and geography, of history and poetry, of traditions, genres, and forms—may well also have been what made it such a challenge to some contemporary readers at least.

---

[1] Richard F. Hardin, *Michael Drayton and the Passing of Elizabethan England* (Lawrence: University Press of Kansas, 1973), 9.
[2] Bart Van Es, "Michael Drayton, Literary History, and Historians in Verse," *The Review of English Studies* 59, no. 239 (2008): 255.
[3] Philip Sidney, *An Apology for Poetry, or The Defence of Poesy*, ed. Geoffrey Shepherd (London: Nelson, 1965), 111.
[4] Michael Drayton, *Poly-Olbion*, in *The Works of Michael Drayton*, eds J. William Hebel, Kathleen Tillotson, and Bernard H. Newdigate, 5 vols (Oxford: Basil Blackwell, 1961; first published 1931–41), 1. 1–7.
[5] *Ptolemy's Geography: An Annotated Translation of the Theoretical Chapters*, eds and trans J. L. Berggren and A. Jones (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2000), 57.
[6] Arthur Hopton, *Speculum Topographicum: or the Topographicall Glasse* (London: Nicholas Okes for Simon Waterson, 1611), B1r.

Sir William Dugdale による好古学とアイデンティティ探求

Antiquities of Warwickshire と *History of St. Paul's* を中心に

高野 美千代

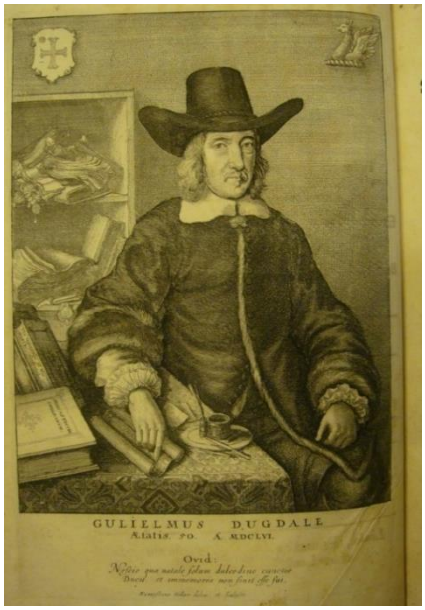
はじめに

本発表では、近世英国を代表する好古学者（アンティクエリー）のひとりである Sir William Dugdale（1605-86）が、共和政時代に発表した作品 *The Antiquities of Warwickshire*（『ウォリックシャの故事』、1656 年出版）と *The History of St. Paul's Cathedral in London*（『ロンドン聖ポール寺院の歴史』、1658 年出版）において試みたアイデンティティ探求の目的とその方法を検証する。紋章官であった Dugdale がこれらの作品を執筆したのは、好古学者としての、あるいはロイヤリストとしての極めて強い使命感のためであった。前者 *The Antiquities of Warwickshire* はトポグラフィーあるいはコログラフィーと言われるジャンルに属するもので、著者の故郷であるイングランド中部のウォリックシャ地方を題材とする。後者は英国国教会を代表する主要教会であるロンドン聖ポール寺院を題材とし、その歴史と教会内部の墓碑の調査を行ったものである。いずれの書物にも、芸術家 Wenceslaus Hollar（1607-77）の手による版画、たとえば建築やモニュメントの精緻な描写が挿絵としてふんだんに使用された。文字のみの著述と比較すれば、極めて高いリアリティとインパクトを持つ書物となっており、これらは著者と版画家の協働によって完成した産物と言って差し支えないだろう。

Dugdale の研究対象と方法

17 世紀英国好古学者は主に古文書や遺跡、碑文などを精査することによって、過去を現在に再現しようと試みた。その背景には、16 世紀とくにエリザベス朝イングランドにおいて、国の繁栄、ナショナリズムの高揚などにより、母国の過去を解明しようという意識の芽生えがあった。また、アングロサクソン語の理解が進んだことなど、好古学研究が発展するにふさわしい状況が整ってきたことも確かである。そのような時代に、William Camden (1551-1623） の *Britannia* (『ブリタニア』1586、 初の英語訳版 1610) が世に出され、英国における好古学研究が進展を遂げ始めた。この書物には、古文書や碑文研究のほかに、系譜学、紋章学、固有名詞学、貨幣学、歴史言語学など、あらゆる歴史補助学の要素が含まれていた。それらすべてがナショナル・アイデンティティあるいはローカル・アイデンティティの探求にかかわるもので、ダグデールはこの研究方法を踏襲している。

好古学者の務めは膨大な量の古文書・史料を解読し精読して、過去の社会構造、地理、言語、教会、土地の風習などを著述によって再現することであった。Dugdale の肖像画は彼の営為を物語っている。背後の書棚にはマニュスクリプトらしい古文書が雑然と置かれ、一方彼の脇にある書物は、研究の成果とも言える自身の著作 *Monasticon Anglicanum* (『英国の修道院』、1655 出版)と *The Antiquities of Warwickshire* である。



Sir William Dugdale の肖像
（Wenceslaus Hollar 作）

The Antiquties of Warickshire におけるアイデンティティ探求

ダグデールはこの本の冒頭で、同郷の紳士たちに対し、つぎのように執筆の目的を語っている。

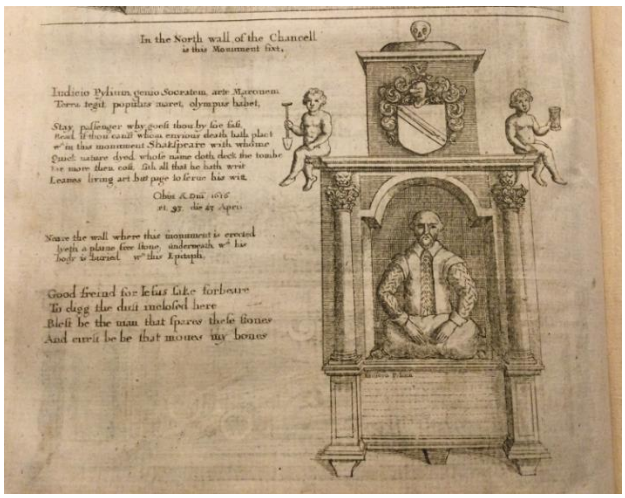
> my principall ayme having been, by setting before you the noble and eminent Actions of your worthy Ancestors, to incite the present and future ages to a vertuous imitation of them; the continued welfare, and lasting honour of your selves and hopefull posterity, being the unfeigned wishes

すなわち彼の目的は、「あなた方の立派な先祖の、崇高で卓越した行いをあなた方に紹介することで、現在のそして将来の世代に、彼らを模範として徳を積むよう促すこと」である。ダグデールは故郷ウォリックシャを細分してその歴史・地理・教会モニュメント・紋章・家系等を、具体的なイラストを交えて紹介し、場所と人とのつながり、過去と現在そして未来のつながりを読者に伝えている。そのことによってローカル・アイデンティティの構築を行い、人々の間には地域への帰属意識の形成が促されている。

この書物においては、ウォリックシャに関係のある著名人の墓碑などの版画を添えて説明しているが、も

っとも有名な例を挙げるとすれば、ストラトフォードのホーリートリニティ教会にあるエリザベス朝劇作家ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)のモニュメントがある。これは、シェイクスピアの墓碑を描いたものとしては初めての版画とされる。しかし実際のところ、ホラーの作品の割には、実物と異なる不正確な部分が多く、むしろ滑稽にさえ見える。それはこの版画が、絵画を専門としないダグデール本人が1634年頃に描いたデッサンを基にホラーが制作したためである。

この書物は 17 世紀のうちに再版されることはなかったが、その後18世紀に入ると2巻本（1730）や新たな版画が数十枚挿入された増補版(1763)、そして内容をウォリックシャの主要都市である Coventry に限定して編集した抜粋版（*The Antiquities of Coventre,* 1765）も出版されている。



The Antiquities of Warwickshire におさめられた William Shakespeare のモニュメントと墓碑銘文

The History of St. Paul's の出版

一方の *The History of St. Paul's* は、17 世紀半ばの英国で用いられるようになった予約購読出版制度によって出版され、40 名ほどがサブスクライバーとして出版を資金面で支持した。ひとり 5 ポンドを負担して、イラスト用の銅版画制作費用を補助すると、聖堂の内部や外観を描いた挿画に自身の紋章、氏名、モットーなどが刻まれ、さらに出来上がった書物を受け取ることができた。

The History of St. Paul's が出版された共和政時代において、英国国教会は機能していないばかりか、聖堂は傷み、冒涜的な行為によって崩壊の危機に晒されていた。Dugdale は、寺院内部のモニュメントと墓碑銘を記録し、過去の著名な人物の功績や重要な家系血統や親族関係を保存することを通して、国教会のシンボル的存在であった聖ポール寺院の権威と伝統を後世に伝える書物を制作した。この作品の背景には、過去を記録するという好古学者の熱意に加えて、共和政時代の英国において衰退し蔑まれている英国国教会への嘆き悲しみ、さらには教会を冒涜する者への不満そして怒りという感情を共有するロイヤリストの支持があったのである。[1]　つまり、この本においては、内戦どころか、宗教改革以前からの聖堂の長い歴史を振り返り、ダグデールにとって正統な宗教的アイデンティティの理解を示すことになった。

The History of St. Paul's において著者は主に古文書の研究と碑文の記録によって過去の解明をしているが、書物史の観点から言えば、この書物の特殊な点は、版画家 Hollar との協働により、芸術性においても 17 世紀英国書物の中で頂点を極める作品となったことである。Hollar の版画によって好古学書がテクスト本文以外の価値を携えるようになり、書物は図鑑的な性格を帯び、一種芸術品のようなインパクトさえも持つようになった。[2]　Dugdale が尊敬していた Camden にはロンドンウェストミンスター寺院内の碑文を丁寧に記録した著作（*Reges, Reginae, Nobiles et alii in Ecclesia Collegiata B. Petri Westmonasterii Sepulti*, 1600）があるが、それは文字のみで構成された。モニュメントや教会建築のイメージをふんだんに取り入れた Dugdale の著作とは対照的である。

聖ポール寺院で主任司祭を務めた詩人 John Donne（1572-1631）の墓碑を扱った部分を例に挙げると、ページ中央に死者が骨壺から立ち上がるような姿をしたモニュメントが描かれ、上部には、左側に紋章、右にカルトゥーシュがある。カルトゥーシュから、版画制作資金を負担したサブスクライバーは Margaret Clapham という名の女性であることが読み取れる。そこには、「私（Clapham）はこのような偉大な教会があまりにも荒廃し冒涜されていることを嘆き、著名で雄弁であった John Donne 博士のこのモニュメントの記憶を保存して後世に奉献することに心を砕いた」という意味の文句がラテン語で刻み込まれている。冒涜的な時代の風潮への危機感を共有したロイヤリストたちが、この書物のサブスクライバーとなって出版を支援し、それと同時に自身の感情を吐露し、記録する機会を得ることとなった。

むすび

ホラーによるダグデールの肖像の下には「祖国の地というものは、何かはかり知れない魅力によって人を惹きつけ、忘れさせることはない」というオヴィディウスの言葉がラテン語で記されている。祖国・故郷への思い、ノスタルジア、失われあるいは変わりゆくものをいま記録しなければならないという使命感が原動力となって、ダグデールは緻密な作業に没頭し、アイデンティティ探求を続けたのである。

---

[1] Graham Parry & Michiyo Takano (2020) "The Illustrations to Dugdale's *History of St Paul's Cathedral*: Subscribers and their Sentiments", *The Seventeenth Century*, 35:4, 473-495, DOI: 10.1080/0268117X.2019.1621486

[2] Elias Ashmole, *The History of the Most Noble Order of the Garter* (1672), Francis Sandford, *A Genealogical History of the Kings of England* (1677), Robert Thoroton *Antiquities of Nottinghamshire* (1677)など。

博物誌に描かれる近世オックスフォードシャーの科学と自然

ロバート・プロット著『オックスフォードシャーの博物誌』抄訳

佐藤 幸治

はじめに

ロバート・プロット(Robert Plot, LL.D, 1640-1696)は、オックスフォードのアシュモリアン博物館初代館長、およびオックスフォード大学の化学の初代教授を務めた科学者・アンティクエリーである。彼の主要著作は『オックスフォードシャーの博物誌』(*Natural History of Oxfordshire,* 1677)および『スタッフォードシャーの博物誌』(*Natural History of Staffordshire,* 1686)という地域博物誌である。両書ともに、天と大気、大気と水、大地、石、形を持つ石、植物、動物、人間、諸技術(工芸)、古事と古物の全10章から構成されている。近世の博物誌が自然科学のみを扱うのに対して、プロットの博物誌は人間に関する事柄や諸技術(工芸)、民俗学、考古学をも含んでおり、いわば万物誌といった古い博物誌の形式を踏襲している点に特徴がある。本発表においては『オックスフォードシャーの博物誌』全体を概観し、注目すべき事項を挙げ、その解説を行う。

各章の概要と注目すべき事項

第1章の「天と大気」の章で最初に取り上げているのは、珍しい天体や気象現象で、実際の太陽の周辺に現れる幻日(*"Parhelia"* or *"mock-Suns"*)に関する観察記録とその原因に関する考察である。中世においてはこの現象によって三つの太陽が現れると、占星術師によって三頭政治が行われると言った予言が行われていた。しかし17世紀の後半になると、このような不可思議な現象を何らかの予兆と捉えるべきではないといった社会的傾向が現れてくるが、これは、当時の科学の発達を背景にこれらの現象を実験によって検証し、科学的に解明しようと言った機運が現れてきた証左と言えよう。本文ではこの現象が大気中に生じた氷のプリズムによって引き起こされるのではないかと仄めかされている。次にかつてオックスフォードシャーを襲った、暴風や雷をともなった大嵐の例をいくつか紹介し、こういった気象災害を予報できないかといった試みが提示されている。天気予報を科学的に行おうとする試みが、既にこの時代に行われていた点は評価されるべきであろう。そして第1章の最後では、音の反射(多重反射)やこだまの回数に関し行われた実験的検証が、ウッドストックという実際のフィールドを使って、行われたことが記録されている。

第2章の「大気と水」では、著者はオックスフォードという土地の居住における優位性を論じていて、それは土地の空気と水の清澄さによるものであって、それを維持するための環境保全がなされているからであると強調する。ここでは、簡単な試薬を使った水質検査が提示され、薬品添加による水質の改良が提案されている。このことからは、従来の錬金術とは異なる現代化学の萌芽が見て取れる。また本章では、*"ice-meers"*(錨氷)[1]と呼ばれる、川底から凍る特異な結氷現象も報告している。これは現代になってようやくメカニズムが解明された現象であるが、プロットはいち早くこの現象に注目し、記載している。

第3章の「大地」では、当地に産出する土壌の種類と性質、その特色と利用について論じている。

第4章の「石」では、各鉱物が示す性質や提供する用途、人間の装飾や楽しみに供されるものに関して各論的に示している。

第5章の「形を持つ石」では、前章のマッシブな産状(塊状)を呈する石に対して、形状を有して産する石について論じている。すなわち自然によって造形され、一般的用途よりも鑑賞で賞賛されるべく生じた石について解説していて、これらの石(鉱物)をスパー(光沢平面を有する結晶質石)、石化石(化石)、ラピデス・スイ・ゲネリス(*"Lapides sui generis"*すなわち特殊石)、及び偶然に(アクシデントによって)形づくられた石に分類し、特にラピデス・スイ・ゲネリスを、本来石が有する‘塑性的造形力’によって形成された‘形状石’と位置付けている。たとえ無機の塩であっても、生物に類似した形状を作り出すことがあって、その中では生物と結晶の対称性における類似も指摘している。この点では筆者は偏奇結晶[2]にいち早く注目した研究者であったと言えるだろう。また一方で、筆者は恐竜化石の発見に貢献した世界初の研究者でもある。当時錚々たる大鉱物学者が否定する中で、コーンウォールで採掘された石がラピデス・スイ・ゲネリスや偶然形づくられた石ではなく、本物の生物の遺骸化石であると断定し、それが未知の生物である可能性を示唆している。

第6章の植物の章では、地域固有の未発見の植物の紹介と共に、ネヘミア・グルー博士の説を引用しながら、当時物理学者ロバート・フックが発明した最新鋭の機器である顕微鏡を使って、樹木の断面組織を詳細に観察し、樹皮を剥すと樹木が枯れるといった迷信が誤りであることを論述している。このような顕微鏡による植物組織の観察は、中世からの旧態依然とした薬草学、本草学の世界を一変させた。

第7章の動物の章では、オックスフォードシャーに生息する各種特異な動物を紹介した後に、社会性を有する昆虫ミツバチの研究が紹介されている。とりわけ巣分かれ現象に注目し、こういったミツバチ固有の特性を、実験や観察

を通して効率よく制御することで、蜂蜜の生産性を向上させることができるとされる。新たな視点に立って自然科学を学び、その成果を活用するといった点は、新時代の傾向であるといえ、詳細な観察結果は小冊子にまとめ上げられ、ミツバチ飼育のための教本として活用された。

第8章の人間の章では、全体を3部に分け、第1は、誕生前か、誕生のことで、‘胎内で泣く胎児’‘母親の陣痛が夫に伝わる共感性’‘多産の迷信’及び‘高齢出産’についての話題が提供されている。第2は、人生においてのことで、‘小人’、‘不食の人’、‘奇病（アセロラ・ガマ腫）’、‘処刑されても死なない女性’、‘古からの慣習’、‘奇祭(ホックデイ)’、‘予知夢’について、第3は、死や墓のことで、‘死を知らせるノック音’、‘ウッドストックの悪魔騒動’、‘腐敗しない死体’についての話題がそれぞれ紹介している。新しい時代の息吹を感ずるような話題はないが、古から伝えられる逸話や、民俗学、ややオカルト的な内容も含まれる点が興味深い。

第9章の諸技術(工芸)の章では、オックスフォードシャーが生んだ偉大な研究者や開発者の業績を紹介している。まず天文学の分野では、中世の修道士で「驚異博士」と呼ばれたロジャー・ベーコンが光学望遠法を確立し、ユリウス暦、太陽年において、一年を365日6時間と補正する契機をつくった。一方クイーンズ・カレッジのエドムンド・ハレーは、惑星の楕円軌道仮説を提唱、クリストファー・レンは、一定した土星の観察から惑星や月の秤動の理論を、更には月の測定や望遠鏡による調査によって月の地図をつくりあげ、月面地理学を提唱した。空気、火、水力式の装置、機械に関しては、まず前出のロバート・フック及びロバート・ボイルによる圧縮空気による機関‘空気ポンプ’、気圧計がジョン・ウォリスによって発明された。一方水に関するものでは、水路航行用ゲートの設置が挙げられる。また水流を駆動力としたものとしては、アンソニー・コープ卿の邸宅の噴水設備や水時計がある。農業技術では、接ぎ木技術を駆使した新種ブドウの品種改良が挙げられよう。注目すべきは神学者、ナーシサス・マーシュによる楽器の弦の振動（リュートとビオールの弦の間の共鳴）に関するもので、実験的、理論的検討が詳細に開示されている。最後に、医学の分野では、クリストファー・レンによる脳の部位ごとの機能の解明や、初の動物への注射の試みなど注目すべきトピックが紹介されている。

第10章の古事・古物の章では、まずはシンベリン王の貨幣、イケニ王プラスタグスの貨幣といった古代貨幣の紹介の後に、エレクトラム(金、銀合金)の発掘と流通に関して解説し、古道(公道)の探索に続く。次には塚、セプルクレス(墓)、石柱、ブロックやタイルで構成された舗道、城塞と堡塁、環状列石(ロールリッチストーン)などが紹介される。その上で古代記念碑の中には、天然の石を加工したものではなく、人工の石が使用されているものがあることを指摘している。最期には、庭園で掘り出された場違いな遺物、彫刻石についても紹介している。

まとめ

科学者としての視点からプロットは『オックスフォードシャーの博物誌』においてつぎのような重要な記述をしている。

1．プロットは、ウッドストックという具体的な場所を設定し、現実のフィールドで、木霊(こだま、やまびこ)現象の計測を実施して、その具体的検証から現象の解析を行った。
2．オックスフォードシャーが居住地として優位性があるのは、空気と水が清澄であるからと考え、積極的な環境対策として、河川、湖水に適切な薬品を投入することで、浄化するという提案を行った。
3．河底から氷結する現象(アイスメーア)に注目し、記載報告している。
4．無機の塩(鉱物)の中には、生物を想起させるような形状を持つものがあることを指摘し、これをラピデス・スイ・ゲネリス(特殊石)と呼称し、いわゆる偏奇結晶[2]に注目した。
5．コーンウォールから掘り出された石が、特殊石や偶然造形された形状石であることを否定した。プロットはそれを生物の化石であると断定し、それが未知の動物の化石(後にディノサウルスと解明される)であることを示唆している。
6．天文学、数学、技術工芸、建築学、医学など幅広い分野で貢献したクリストファー・レンを紹介している。とりわけ医学の分野において、現代にも通じる脳の機能の研究、注射による治療技術の開発において先進性がある。
7．古代の石碑、ストーンサークルを構成する石材の中には、人工の石があることを指摘した。

---

[1] 鈴木、橋場、吉川、黒田、「アンカーアイスが結氷河川の物質循環に与える影響」『河川技術論文集』第21巻、2015、49-54頁。

[2] 偏奇結晶とは、高過飽和或いは高過冷却環境下の急速な成長によって生じる特異な形態を有する結晶、骸晶、樹枝状結晶、球晶などを指す。(参照：森本、砂川、都城『鉱物学』、1975、岩波書店)

内乱期の教育改革に見られるアイデンティティの揺らぎ
ウィリアム・ペティの合理主義の影響[1]

菅野智城

（画像はすべて Wikipedia より引用）

はじめに

16 世紀以降のヨーロッパにおける印刷本の普及は、偶像および儀式の文化から書物の文化への移行を推進させたという点において宗教的にも意味があった。偶像破壊の危険性を悟ったカトリックが絵画、音楽、ガラス、彫刻で教会を飾り、荘厳な宗教感覚によって民衆の支配を維持しようとしたのに対し、プロテスタントは、民衆が聖書をとおして神の言葉を直接知ることを強調した。さらに 1641 年に検閲制度が事実上廃止されたことで、当時のイングランドは印刷物の流通量においてヨーロッパでも高い水準を誇るようになった。本発表では、内乱期の教育改革とアイデンティティの関係を、ウィリアム・ペティ（William Petty, 1623-87）の教育パンフレットに見られる合理主義と関連付けながら考察する。

教育改革とアイデンティティの揺らぎ

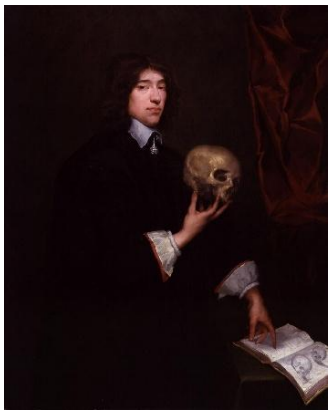
内乱期の教育改革は、いわゆるピューリタンと呼ばれた人々の力によるところが大きい。彼らが重視した教育は聖書を自力で読むための識字教育であり、教育に価値を見出した彼らの活動が科学技術を重視するベーコン学派の理念と結びついた結果、あらゆる階級への教育の浸透とカリキュラムの近代化が進んだ（ストーン 54-55）。[2] 教育に対するピューリタンの熱意は、個人に依存する信仰意識を発達させた点において一定の役割を果たしたが、その一方でジェントリなど経済的に余裕のある家庭は、聖職者、弁護士、医者といった社会的地位のある職業に就かせるために子どもを名門校に入学させていた。そこでは依然として伝統的な古典教育が重要な地位を占め、階級間の教育格差が解消することはなかった。

17 世紀のグラマースクールではギリシア・ラテン語教育が中心で、実学教育の導入は限定的なものであった。とはいえ、一部のグラマースクールでは社会の変化に応じて算術、測量、外国語などを取り入れる動きも見られた。実践的な教育が本格的に導入されたのは、Merchant Taylors's School をはじめとする商業学校（貿易都市などで発展）、海洋貿易や植民地政策により発展したナビゲーション・スクール（Navigation School）、そして王政復古以降では非国教徒向けのディセンティング・アカデミー（Dissenting Academy）などであった。これらの学校の発展は、イングランドが実用的な知識を重視する国へと変化する流れを生み、18 世紀の産業革命の準備へとつながった。同時にそれは上流階級に独占されていた古典教養と一般市民階級の実用的知識の間に緊張をもたらした。そこでは社会階層における意識の変化とともに、アイデンティティの揺らぎを見ることが可能である。

ハートリブ・サークルとペティ

17 世紀の教育の変化は、宗教、科学、社会階層から国家観など、各分野における新たなアイデンティティの形成を促した。それにより従来の伝統的価値観が揺らぎ、新しい個人、社会、国家のあり方が模索される時代へと移行した。

内乱期の教育改革に尽力した人物はサミュエル・ハートリブ（Samuel Hartlib, c1600-62 ）である。彼はプロイセン出身であり、1628 年にイングランドに定住した。その後、知的ネットワークであるハートリブ・サークルを組織し、1630 年代から王政復古までの約 30 年間、農業改革、教育改革等、幅広い活動を展開した。その中でも特に力を入れていたのが情報局構想（the Office of Address）である。これは科学的発見や発明、クラフトマンシップに関連する情報共有を意図するものであった。このように、ハートリブ・サークルの教育改革は、階級間の経済的格差の解消、実践的教育、貧民層の生活保障、そして現在の科学技術分野では当然のものである学問研究のインフラ整備を目指した。



William Petty の肖像画
（Isaac Fuller 作）
https://en.wikipedia.org/wiki/William_Petty#/media/File:SirWilliamPetty.jpg

ハートリブ・サークルから出版された教育パンフレットの代表的なものとしては、以下の 3 つが挙げられる。

・ジョン・ミルトン『教育論』（*Of Education*, 1644）
・ウィリアム・ペティ『提言』（*The Advice of William Petty to Mr. Samuel Hartlib for the Advancement of Some Particular Parts of Learning*, 1648）
・ジョン・デュアリ『改革された学校』（*The Reformed School*, 1650）

特にミルトン（John Milton, 1608-74）とペティの教育プランは対照的である。『教育論』はハートリブの改革思想とは距離を置き、伝統的人文主義の姿勢を貫いている。これは学問の目的を、美徳と信仰の結合による堕罪の影響の回復に求めているためである。一方、ペティが『提言』で示したものは人間の精神的な成長を目的とする教育ではなかった。貧民救済に重点を置いた才能と技術の可視化と実践的教育（ものづくり）

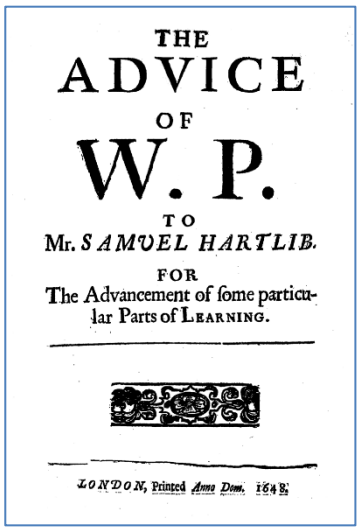
が社会全体の利益の創出が国民全体の生活を豊かにするという考えに立つペティは、教育改革の枠を超えた国家論を提案していると言える。

ペティの教育パンフレット

ペティの『提言』は「貧民救済」「職業訓練」「実践的教育」といった言葉で定義づけられることが多く、その内容は以下のように 3 つの教育施設の提案によって構成される。

・子どもの（ものづくり）教育施設（Ergastula Literaria, Literary work-houses）
・成人の高等技術養成所（Gymnasium Mechanicum or Colledge of Trades-men）
・科学技術アカデミー（Nosocomium Academicum）

ベーコン主義的傾向の強いペティの教育プランは、知覚による観察や実験を重視し、技術力の向上や発明による利益創出を掲げるなど実践的な点が多く見られるが、彼の教育思想は合理主義によって支えられている。『提言』冒頭では、技術力向上における目的、方法、結果の道筋が明確でなく、新たな技術や発明に関する情報が共有されずに各所で重複している状況に対する危機感が述べられている。ペティはそのような才能が散逸する状況を戦場にたとえて批判し、ハートリブが提唱する情報局構想に賛同している（*Advice* 2）。


THE
ADVICE
OF
W. P.
TO
Mr. SAMUEL HARTLIB.
FOR
The Advancement of some particular Parts of LEARNING.

LONDON, Printed Anno Dom. 1648.

William Petty 著 *Advice* の表紙
https://en.wikipedia.org/wiki/The_Advice_to_Hartlib#/media/File:Petty1647Hartlib001c.png

ペティの関心は個人の経済力の向上、科学技術による社会全体の発展がへと向けられており、教育は知識の伝達、継承ではなく、実学をとおして生産性を高め、国家の富を増やすための手段と位置付けられている。彼の考え方は、当時の伝統的な人文主義を中心とする教育とは一線を画し、数学や測量、統計学といった実践的な学問の修得と利益創出を強調している。そのためには、教育の目的は個人の精神的向上ではなく、社会の効率化と経済成長に直結する必要があった。

新しい教育制度・教育インフラの整備の必要性を説き、経験による学習、技能の習得を中心とする実践教育が提案されていながら、『提言』の根底にあるのは自然科学分野を中心に幅広い知的領域を究めた知的エリートであるペティ自身の経験に即したエリート教育論であると言えるかもしれない。しかしそれは、国家の利益＝経済という視点から論じることによって教育を伝統から引き離して論じる試みでもあったと言える。

ペティが晩年にピープスに送った書簡の中で「信仰の自由とは何か」という問いへの見解を述べる際、権威主義に陥ることの危険性と、精神的・主観的なものから離れることの必要性を述べている（Rawlinson MS. A. 171, fol. 274）[3]ことは注目に値する。宗教を否定するのではなく、信仰をはじめとする宗教的要素を科学から意図的に切り離している点に、ペティの合理主義の本質を見ることができるのである。彼はベーコンの経験主義に影響を受け、数量化（定量化）による知識の獲得を重視したが、それは 17 世紀の「神の意志は自然の法則を通じて理解できる」という自然神学の考えによる。マルクスはペティを「経済学の父」と呼んだが、そのような彼の経済学は神の設計を数的に解明し、それをマクロな視点で人間社会全体に適用する試みであると解釈できる。ペティは、権威、精神、主観といったものを排除することで徹底的な合理主義を貫いた。

ペティの客観的な分析手法は信仰や神の意志に依存するものではなかった。人口や経済の動きが自然法則に従っているという発想は、ニュートンの物理法則が神の意志を示すという自然神学的な思想に近い。彼の経済学は、人間の行動も神の作った法則に従うものであるならば、それを発見することが科学の役割であるという考えに立っている。自然神学的な視点を持ちつつも、経済を客観的なデータで解明した点において、ペティは近代経済学の先駆者であると同時に、自然神学と科学の調停者あるいは橋渡しのような立場だったと言える。

おわりに

17 世紀のイングランドでは、経験と観察に基づく知識を重視する流れが強まり、それがイングランド的な知のあり方として定着した。ベーコンの帰納法やニュートンの自然法則の考え方と同様に、ペティの経済学はイングランドが経験に基づく知を重視する国であるという自己認識を強める役割の一翼を担ったが、その原型はすでに『提言』に見ることができる。経験と観察に基づく知識と、経済的な生産性との関係が強まることで、世界を合理的に分析し、科学的な知識を蓄積するという意識を社会に浸透させる契機を作り出したという意味では、ペティは国家運営や社会全体の意識、さらにはイングランドのアイデンティティの変容に一定の影響を与えたと言えるだろう。

---

[1] 本研究は JSPS 科研費 23K00393 の助成を受けたものです。
[2] ローレンス・ストーン『エリートの攻防：イギリス教育改革史』佐田玄治訳 御茶の水書房、1985 年。
[3] “A dialogue between A. and B. on liberty of conscience, 1687.” Rawlinson Manuscript, A. 171. Waston Library, Bodleian Libraries, Oxford.

アイザック・ウォルトン『ジョン・ダン伝』に見る包容主義

分裂を孕む伝記と国教会主義のアイデンティティ

曽村 充利

国教会の中道政策・包容主義 ⇒ ごた混ぜの教会

国教会は、完全な教会は天上にだけ在って地上には存在し得ず、国教会のあるべき姿は時代によって左右に揺れることがあるが、理想の教会を目指して不断に垂直に上下に運動し続けなければならないと考えた。ゆえにエリザベス女王とジェイムズ一世はローマ・カトリックおよびピューリタン改革派との衝突を回避するため中道政策 via media を採用した。教会の分裂は国家の分裂を意味していた危機の時代であり、国教会は国内のプロテスタント勢の結集を図り、国外カトリック勢力から国を守る対抗策として包容主義（Comprehension）を基本とした。純化を目指さず、信仰を明確に定義せずに論争を避け、教会統治や教義や儀式の決まりを緩めて、教会分離主義的ピューリタンに国教会内部に留まるように説得し続けた。女王は強制を嫌い、人々が国王至上法と礼拝統一法さえ遵守しさえすれば、個々の内面の自由には干渉しない方針を取った。結果として国教会は考え方の異なる多様な人々を排除せず広く受け入れ、衝突と分裂の危険を孕むごた混ぜの社会の現実を反映した、いわばごた混ぜの教会として成立した。政体としてはイングランドは論理的には立憲君主制であり、法的に国王はつねに議会の同意を必要していた。この時代に国教会のアイデンティティが意識化され、神学、詩、演劇、歴史、好古学などによって盛んに言語化されるようになるのは必然であった。

アングリカン的人間類型の創造 ⇒ 国教会のアポロギア

宗教改革以降のイングランドの保守思想は、ローマ・カトリックとピューリタン改革派両派に挟まれ、対立関係によって規定され、政治的圧力の中で成立した。『釣魚大全』（1654-76）と『伝記集』（1640-78）はより積極的に宥和と総合を志向しており、宗教改革以来の混乱と分裂の超克をつねに課題とする保守的人間のアイデンティティを明確にし、安心立命を与えようとしている。極端な意見を嫌い、敬虔で素朴で柔和な人間のあり方は、硬直した宗教的反動とは無縁であった。イングランド人の気質に合う包括的な共同体的統合感覚を持ちながら、同時に改革派との議論の応酬の中で、合理的批判的な開かれた性質を持つ点で、より普遍的な世俗性と近代性を内に秘めている。歴史的に見れば、この二冊の本が英国民のアイデンティティ形成に与えた貢献は小さくないであろう。

ウォルトンの五人の国教会徒の生涯を集めた『伝記集』は、それぞれアングリカニズムのアポロギアという性格を持つ。『ダン伝』では、カトリックからの改宗者が国教会の高位聖職者となる人生を描くことでイングランド宗教改革の正統性を示している。『サー・ヘンリー・ウォットン伝』は外交官ウォットンがヴェネチアで宗教改革を画策する。大主教の依頼で執筆した『リチャード・フッカー伝』は、王政復古後の国教会の理論に正統性と権威を与える意図を持つ。詩人の『ジョージ・ハーバート伝』には、司祭たちにアングリカニズムの精神を吹き込む目的があった。『ロバート・サンダーソン伝』執筆の目的は、議会派に対して王党派の最終的勝利を半ば公的に宣言することであった。

ダンとアウグスティヌスの改宗の類似 ⇒ ローマ・カトリックと国教会は対等という主張

国教会は、ローマ・カトリック、ルター派、カルヴィン派教会等どの教会も普遍教会（catholic church）から派生した一つの肢であるという思想を持っていた。これは国教会とローマ・カトリック教会は対等であるという主張につながる。『ダン伝』ではダンの改宗とアウグスティヌスのそれとの連想が喚起されている。二人の人生を重ね合わせて、ダンの聖職者としての権威付けをする。野心的で放縦な青春時代から改心して、以後敬虔な後半生を送る人生の軌跡が似ている。しかしウォルトンにとって大切なのは、二人が改宗したという事実であった。マニ教からキリスト教へ改宗し初期教会最大の教父となったアウグスティヌスと、カトリックからアングリカンへ改宗して国教会の高位聖職者・花形説教者となったダンの、類似性を強調する目的があった。ウォルトンは「今や英国国教会は第二の聖アウグスティヌスを得た」と書いている。国教会聖職者になることは、トマス・モアに連なる誇り高き家系のカトリシズム信仰を棄てることを意味した。同時に、イングランドの再旧教化を目論むローマに向かって、宗教改革後の英国国教会の正統性を主

張し、ローマ・カトリックと対等の立場にあることを主張する意図が込められていたと推測される。その意味でこの作品が十七世紀イングランドの聖職者の伝記の精神を継ぐものであることが判る。

ダンはアングリカニズムの象徴 ⇒ 雑多なものを内包する ⇒ 近代と信仰の葛藤

国教会はカトリシズム（保守）とプロテスタンティズム（改革）双方の相容れない要素を包括する教会となったが、チューダー朝からステュアート朝を生きたダンの人生と作品にもまた相矛盾する様々な要素が混在している。葛藤とその融合は、国教会の在り方と類似している。カトリック教徒からプロテスタントへの改宗、野心的で放縦な街の洒落者から敬虔な聖職者へ、青春時代の放蕩とアンへの純愛、恋愛詩の独創的遊びと過剰な自己劇化、『風刺詩』のシニシズム、宗教詩に見られる激しい苦悩、高潔な高位聖職者と俗物性、アウグスティヌス主義的な否定的人間観とトマス的な肯定的人間観、中世的神学と新しい哲学、カルヴィン（予定説）への尊敬とアルミニウス主義（自由意志説と万人救済説）の受容、教会政策への恭順の意と大主教ウィリアム・ロードへの屈折、ダンはこれらのもろもろを一身の中に抱え込み、それらが破裂し分裂することのない人格を持ち、人生を送った。そしてウォルトンの描く矛盾と融合を一身に体現するダン像は巧まずして国教会の隠喩になっている。さらに中年まで俗人であったダンが聖職者となった事実は、新旧の教会同士の対立だけではなく、初期近代における世俗化する社会と教会、つまり俗と聖の葛藤および融合への努力を象徴している。

中世（聖職者の伝記）と近代（俗人の伝記）の融合

『ダン伝』には異なる伝記文学の伝統が流れ込んでいる。特に、ダンの人生は、「聖職者の伝記」(ecclesiastical biography）と「俗人の親密な伝記」（intimate biography）という二種類の伝記を必要とし、ウォルトンはダンの真実の肖像を描き出すために、正直にその二種類の伝記の方法・諸要素を混在させている。それは社会から要請される記念碑としての公的性格と、ウォルトンの親密な気持ち（愛情、友情）とを、伝記の中に融合させるために不可欠であった。そして伝記の分裂を防いでいるのはすべてを包容しようとするウォルトンの思想である。『ダン伝』は『ダン説教集』（1640 年初版）序文の伝記として書かれ、目的は模範的高位聖職者・説教者ダンの称揚と永遠化である。才能と業績と美徳に対する慣用的な賛辞と教訓的な要素が強い。様々な偏りや事実の隠蔽、理想化の傾向は、ジャンルの要請である。また一方で深く尊敬し心から愛するダンの真実の姿を、親しい友人の視点から描き後世に遺すために、当時広く書かれ始めた「親密な伝記」（親しい俗人を対象とした自由な伝記）の影響を受けている。そのために聖職者に相応しくない俗人時代の出来事や振る舞いを書き、内乱時の政治の機微に触れ、ダンの判断の間違いや俗物性にも言及している。概して事実に忠実で、リアリズムに気を使い表現は時に繊細であり、会話や描写において小説的な技術が見られる。結果的に宗教的伝記の伝統的形式からの逸脱、異なるジャンルのコンヴェンションの混交、近代的な表現と中世的約束事が共存し、矛盾する諸要素が緊張と劇的印象を生み出し、『ダン伝』のジャンルにおける新しさと可能性を見ることができる。

真実の手に導かれて⇒ 事実＋信仰＝真実

ウォルトンは公的な国教会擁護と私的な親愛の情という二つの動機から短い伝記を書いたが、膨大な事実の記録の集積となった現代伝記の学者たちとは別の方法論を持っていた。ウォルトンは、序文中で「私の拙い筆が、真実の手に導かれて描ける限りで最高の、著者の生涯の飾らぬ肖像を世の中に示そうと決心した」と言う。「真実の手」とは宗教的メタファーであるが、自分がダンの人生において大切な事実とかんがえるものを選択し、主観的に描いた肖像が真実であることへの自信を表している。国教会の擁護者ジョンソン博士はウォルトンを高く評価し、「『ダン伝』が［五篇中］もっとも完璧である」とボズウェルに語っている。『ダン伝』は一人のアングリカンの生涯を文学の楽しみとともに描き、長く広く読まれ続けて、イギリス人のアイデンティティの確立に貢献したと考えられる。